

空気を交える贈与のリレー

—— 現代アメリカ小説『ヘルプ』に見る統制と共生 ——

齋藤 修三

〈要旨〉

「近代社会における統制と共生」というテーマを受け、本論文は「場の空気による統制とはどのようなものか。そしてそれを克服し、より民主的な共生関係を場にもたらすには何が必要か」を上述の作品を通じて考察する。題材は米国少数派をめぐる小説だが、本論文は日本・韓国・沖縄を含む世界各地の少数派の直面する「場の空気」を広く念頭に置いている。まず支配的な諸イデオロギーによって重層決定された「世間」と「空気」の関連を明らかにし、「空気による統制」が見えない相互監視と相互規制によって「他人指向型」の社会的性格を持つ現代人を「横並び」や「みんなからの承認」のもと他律的な安心へ誘い込み、進んで空気に同調し自分の「色」を消すよう操作する過程を論じる。次に統制が克服される過程を跡づける。空気に溶け込んだ多数派が醸し出すルサンチマンに満ちた場の閉塞感は、あえて「空気を読まない」少数者の贈与の絆によって風穴を開けられる。つまり抑圧的な空気の下で違和感や孤独を抱えた赤裸々な自己を特定の他者へ丸ごと差し出す贈与的^{コミュニケーション}交換が自尊感情の相互承認をもたらす。それによってエンパワーされた個同士は、共通の目標下で自律的に連帯する中で、自己の安心に代わり、他者と信頼を築こうとする新風を吹かせる。この一連の過程を作品から読み取った。

キーワード：場の空気、世間、贈与、エンパワーメント（自尊と自律の奪回）、アメリカ文学、
キャスリン・ストケット

1 はじめに：「空気を読め」は壊れかけた「世間」の逆襲だった

『「空気」と「世間」』の著者で作家・演出家の鴻上尚史によると、「空気」すなわち場の孕む暗黙の合意が日本人の言動を大きく左右してきたといち早く指摘したのは、評論家の山本七平だった。日中戦争や太平洋戦争を日本が引き起こした背後に、当時の政治家や軍上層部を取り巻く、「論理的に反論できない」(124) ような「空気の支配」(104) があったとする山本の意見を紹介しながら、そんな「空気」と、歴史家の阿部謹也などが研究した「世間」との間に、じつは興味深い類似点や因果関係があると鴻上は説く。

世間と空気はどのように結びつくのか、以下要約する。世間は伝統的な地域共同体と日本的企業（終身雇用と年功序列）に代表される。贈与と互酬・長幼の序・所与性（運命性）・集団優先の時間意識・差別的で排他的・神秘性などを特徴とし、人々の暮らしを支える一種のセイフティネットでもあった。所属する世間が個人の価値観や善悪や生き方全般、つまり日本人の自我を同質的に支えてきた。しかしここ何十年かの間に都市化と経済的・精神的グローバル化（新自由主義や個人主義等）が進むにつれ、世間は壊れつつある。すると上述した特徴のいくつか^{にな}が欠けて「流動化した世間」が、その解体を不安げに惜しむ人々によって担われ、逆に「どこにでも現れるように」（51）になったと言う。それが「空気」に他ならないと。

壊れかけて流動化した世間が、苛立ちの交じる「空気を読め！」という声となって今や逆襲し始めた。この推移は必ずしも日本だけではないようだ。西洋でも中世までは世間が残っていた。やがてキリスト教がとって代わり、日本人が世間の目を気にするように、欧米人は神との関係を重視するに至ったという阿部の論を踏まえながら、欧米の個人主義がじつは神によって支えられていたように、日本の弱い個人を支えたのが世間だったと鴻上は説く（175）。そして米国プロテスタントの大半をリベラル派とともに占める福音派のなかでも、進化論や中絶や同性婚を認めないキリスト教右派の興隆と、日本人にとって宗教の役割を果たしてきた世間の流動化の間に相同を見る。つまり「古き良きアメリカ」へ戻ろうとするのが聖書原理主義なら、昨今日本のメディアを賑わすネット右翼の本質は格差拡大や自己責任論に疲れて「共同体の匂い」を懐かしみ、「伝統」「家族」「正義」「愛国」と言った言葉が象徴する「古き良き日本」へ戻ろうとする、いわば「世間原理主義」（188）であると喝破する。「聖書を読め」と「空気を読め」を同列に論じるかのような主張はいささか一般化が過ぎるようにも見えるが、グローバル化を不安視する日米の民衆が共に示す保守反動のパラレルな関係には一定の説得力がある。

さて場の空気に気を配り他者へ同調する言動は、日本人に負けず劣らず米国人にも見られる。そもそも日本人は集団主義、米国人は個人主義の心を持つというクリシェ自体が、文化的社会的環境への適応という大切な要因を見落とした神話でしかなく、心や精神の中に集団主義や個人主義の種子を遺伝子のように探る本質主義の誤謬であることを、社会心理学の山岸俊男たちは明らかにしている。戦後第三次産業の広がりを受けてリースマンが名著『孤独な群衆』で予言したように、米国人の社会的性格は産業構造の変化に適応するべく、自分の価値観や規範に固執する「内部指向型」から、「他人の期待や好みに敏感な」（下249）「他人指向型」に変わりつつある。ならば現代アメリカ文学にも、場の空気による統制とそこからの脱却のドラマは当然見て取れるはずだ。

『ヘルプ』（*The Help*）もそんな一つである。公民権運動が広がりを見せる1960年代前半、南部中上流家庭の白人女性たちと「ヘルプ」と呼ばれた黒人メイドたちの屈折に満ちた交流が笑いと感動を呼び、2009年に刊行されると瞬く間^{またた}に全米ベストセラー入り。2011年には映画化もされ、現在日本を含む42カ国で翻訳されている。

この小説なら学生をエンパワーできる。そう思い、今年度からコア科目「共生の文学」のテキストに選んだ。エンパワーとは自己肯定感、自己信頼に基づくマイノリティ文化政治の要である。それは人間関係において安心を優先し他律化（人任せ・傍観）するのではなく、自律的に他者と対等な信頼関係を築くために不可欠の条件をなす。これが現代日本の若者、特に女性はおしなべて弱い。世間が空気となり至る所で甦る中、「KY」と言ったスティグマ化を怖れるあまり、「社会的びくびく人間」（山岸『安心』182）が増えつつある。引きこもりや対人恐怖、うつや摂食障害や低い自己評価など社会的経験の不足に起因する様々な不安は一種の適応障害であり、リースマンの言う「他人指向型」の若者が周囲の空気に同化・適応せねばと過剰に思いこむ強迫観念を引き金とする。そんな横並び意識の強い学生に、空気による統制とそこからの脱却をテーマとする小説を通じて、自律から始まるエンパワーの大切さを知ってもらう。文学研究という狭義のディシプリンを離れても、学科専攻を問わず全ての学生が世間の常識に巢食う様々なイデオロギーを疑う批判精神を磨き、時代の空気に流され他者と「同じ」という幻想が与える安心目当てに群れるのではなく、前向きで自律的な対人能力と社会性を磨く上で文学が果たす役割はなお大きい。この小説を題材にした本論文もまた、ターゲットはあくまでも若い日本女性のエンパワーである。

2 『ヘルプ』が示す、場の空気による統制のかたち（する側とされる側）

小説の舞台はミシシッピ州の地方都市ジャクソン。全国版のTVニュースがキング牧師やベトナム戦争、ヒッピーやロック音楽の流行を時折伝え、激動の時代を予感させはするが、白人家庭のお茶の間は時間が止まったかのように物質文化を謳歌する50年代の保守的な自己満足感がなおも漂う。一世紀前の南北戦争での敗戦に「古き良きアメリカ」の喪失を見る南部人にとり、ジムクロウ法が町を白黒二つのコミュニティに分割し、学校やスーパーや図書館までも二分するのはごく自明の慣習だった。だが女性たちはそうもいかない。夫不在の家庭で美容院に通い、愛国者団体やアフリカの飢餓を救うチャリティやカードゲームの社交にいそしむために、主婦は育児と家事を代行する「ヘルプ」と呼ばれる黒人メイドと自宅で「共生」しなければならない。一方黒人女性の側でも夫のわずかな稼ぎを補う必要上、ヘルプは貴重な働き口だ。白黒二つのコミュニティは相隔たるが、白の心臓部で女たちは雇用の関係と「ママ友たち」の関係、縦と横のネットワークで結ばれ、そこに一つの世間が生まれていた。

だがこの世間、階級や身分が固定されていた奴隷時代のように安定はしていない。主婦たちの人間模様は、現代日本でいじめの温床とされるスクールカーストを彷彿とさせる。ボス格の主婦ヒリーを頂点とする「一軍」は家柄や人格でなく人気度という恣意的な基準で決まるため、取り巻きの「二軍」同様絶えず場の空気に気を配り、ヘルプの評判も含め人間関係に絶えず目を光らせなければならない。ちなみに上昇婚でブア・ホワイトから成

り上がった女シーリアや老女たちが、もっともいじめられやすい「三軍」に相当する。主婦たちのネットワークを巡る有形無形のコシッの質と量が「体制」の維持と変革を左右する点は、いじめの頻度依存性、つまりクラス内で阻止する生徒数と傍観する生徒数の増減率で決まるとする山岸の指摘と良く似ており（『心』57）、空気による統制の一大特徴と言える。もう一つ、場の空気を左右するのが、立ち聞きしたコシッをヘルプが密かに伝え合う裏のネットワークである。失職を怖れ搾取と差別に甘んじる弱者同士として、彼女たちは地元の黒人教会を中心に贈与と互酬の色濃い安定した共同体の一部に連なる。こうしてこの町のコミュニティはいわば中心（一軍と取り巻きの二軍）と周縁（三軍）、そして外部（黒人コミュニティ）と同心円状に権力構造をなし、ヘゲモニー維持を目論む一軍の意向が暗黙の空気となって中心から周縁に波及して同調圧力をかけ、外部との垣根を築く。後述するがこの構造がひとたび何らかの齟齬をきたすと、場の空気はガラッと変わる可能性がある。

物語はヘルプの一人エイビリーンが働く家を、雇い主の旧友で白人の独身女性スキーターが久しぶりに訪れる所から始まる。リベラルで作家志望の彼女は、抑圧されたヘルプの窮状を世に知らしめようと彼女たちの声を集めた証言本を主婦たちに内緒で企画。協力を頼まれたエイビリーンは当初躊躇するが、ヒリーがヘルプに白人宅のトイレ使用を禁じ黒人専用を屋外に作る法案を画策しているのを知り（161）、ついに腹を決める。小説はスキーター、エイビリーンとその親友ミニの三人が主人公として交替にモノログを綴る巧みな構成をとり、主婦とヘルプのやり取りが白人側、黒人側と別々のネットワークを介すことで非対称な両者の権力関係を浮き彫りにする中、中心と周縁と外部を隔てる境界を越境し、パズルのピースのように声なきヘルプの声を秘密裡に集める三人の奮闘ぶりが描かれてゆく。

ヒリーは自分の地位を揺るがす「激動の60年代」の足音に不安を禁じ得ない南部人の反動を代表する、典型的な世間原理主義者として登場する。自分は人種主義に染まっていない善人だと信じて疑わない彼女は（297）、みずからの拠って立つ価値観や行動規範を周囲に押しつけ、リスマンの言う「内部指向型」の悪しき例と言える。トイレ法案は、長年の差別に由来する自分たちの有責感が投影された黒人を穢れとして忌避する白人至上主義者の根深い自己防衛心に訴えたものだし、わが子の教育費の不足分を前借りできないかと自分のヘルプに乞われると、プロテスタントの職業倫理に基づき「本物のキリスト教徒は、元気で稼ぐ能力のある者には施しをしない」と自己責任論を説く（257）。さらに女の幸せは良妻賢母、大学は花婿さがしの場だと信じる彼女は、嬉々としてスキーターにデートの世話を焼く。このようにスクールカーストのボスよろしく、周囲を引っ張る行動力が彼女の人気を支える。女たちを包む場の空気を人種主義、ブルジョワ的貧困者忌避、家父長制イデオロギーで染め上げ、暗黙の合意を集めて統制を敷く。逸脱する者には「異常・危険」のスティグマを施して周縁や外部へ排除することで、自分の「正しさ」が今なお安定した常識だと示す。KKKがリンチで白人コミュニティを守ろうとするなら、彼女は代表を務

める団体の人事やメイドの雇用を操作、真綿で首を絞めるような根回しを通じて主人公たちの企てに対抗する。男女どちらの場合も抑圧と暴力を悪化させるのは、「秩序を守らねば」という過剰防衛に突き動かされる白人の意識である。

しかし彼女がボスでいられる根拠はしょせん場の空気ではない。ムードやノリなどその場しのぎの同意が多い社交において、多数派の声にはネット右翼同様に匿名ゆえの無責任さがつきまとう。加えて専用トイレで黒人排除を目論むヒリーの場合、料理上手のミニーを雇うために裏工作するなど、当の本人がじつはもっとも深くヘルプに依存している。これを万が一知られようものなら、なおさら空気は一変し「裸の王様」よろしく瞬間に世間の恥さらしに彼女は転落する。詳述は避けるが、みずからも自覚するこの弱点をうまく突いたのが、ミニーの作戦だった。「みんなから好かれない」は広義の名誉欲だろうが、多数派の承認・評価ほどあてにならないものはない。空気による統制の特徴は、同時に最大の弱点ともなる。

さて、ヒリーが空気の統制を敷く側なら、統制される側はどのような言動が特徴的か。以下、白人主婦三名を例に挙げる。まずエリザベス。その社会的性格は他人指向型で、自分の意見を抑圧し忠実な子分として終始ヒリーに付き従う。トイレ設置の件では家計を牛耳る夫とヒリーの板挟みに合うし、家具の古傷を隠すあたりは「持ち物＝持ち主の人格」とするプチブルのスノビズムを体現する。他律的で世間の尺度に囚われているのは、その子育てに端的に表れる。幼い娘との人格的な交流は全てヘルプのエイビリーに任せ、何事もよその子どもやマニュアルと比べては「良い子」と娘の格差を気に病む。次にプアホワイト出身でM・モンローのような姿態で玉の輿に乗ったシーリア。プロテスタントの性規範を自明視するヒリーにとって、セクシーな姿態を武器として周縁から成り上がる下品さが許せないのだが、「天然」の彼女は新参者の孤独を癒すべくヒリーにしつこく取り入ろうと一層容姿に磨きをかける結果、ますます主婦たちの反感を買う。そんな彼女が自分の幸せに実感が持てない主な理由は、「相手との出会いを運命と見なし一生添い遂げることが女の幸せ」とするロマンティックラブ・イデオロギーによる洗脳である。料理上手で子どもを産み育てる良妻賢母に一刻も早くならないと、自分を貧困から「救い出してくれた」夫の愛がいつまた醒めるとも限らない。メイドになったミニーと友情を結ぶまで、彼女は決してその不安から解放されない。

流動化した世間＝空気の統制下にあるこれら女性二人の共通点は、支配的なイデオロギーに従属した主体性をまとい、自由意思で服従する点にある。特にエリザベスは周りの目を気にし、世間の尺度でもっぱら選別・評価されるモノ、客体の立ち位置に進んで身を置きビクビクしているため、ヒリーたちとの相互監視・相互規制による承認が、彼女の自尊感情を支える唯一のよすがとなる。程度の差はあれ彼女たちは周囲が良いとするもの、みんなが欲しがるものに主体的に心を奪われている。哲学者竹田青嗣はニーチェの「生の哲学」を踏まえ、ラカンの「欲望とは他者の欲望である」という名言を敷衍しながら、この「みんな」の欲望への感染、他律的な囚われを「一般欲望」と呼ぶ。これが空気による

統制へ人々を内側から駆り立てる牽引力となっている。「みんな」つまり多数者が欲しがるため、一般欲望は人々を暗黙の競合関係に置き、少数の「勝ち組」と嫉妬や不全感（ルサンチマン）を抱えた多数の「負け組」を輩出する（竹田113）。こうなると膨らむ一方の后者の一般欲望が多数派をさらに絶対化し、より強固な他律と外部からの統制を求める世間原理主義を強めるだろうことは察しがつく。なるほどランキングや行列店や買い占め好きの消費主体に始まり、「モテ」や人気投票、キャリアや結婚などライフスタイルの選択に至るまで、世間のムードとマニュアル志向に貫徹され、進んで空気の統制に赴く一般欲望の囚われ人が、こうしてこの時代の米国から現代日本に至るまで再生産されてきたのだろう。エリザベスは私たちの隣人なのだ。

彼女は「みんな」が標準^{スタンダード}だから突出を恐れ、人前では控えめに明るい（その分家庭では不機嫌で娘に当たる）。場の空気に合わせられる「普通に良い人」こそ、じつは頻度依存的に差別や抑圧に加担する加害者となりやすいのだが、本人がそれに気づく余裕はない。なぜなら人当たりの良い仮面が見破られるのでは、という不安につきまとい、周囲への疑心暗鬼と素顔への自己嫌悪を募らせるばかりだからだ。「普通に良い人」とは「社会的びくびく人間」の別名に他ならない。

「シゾフレ人間」（和田91）とも言うべき現代人の特徴を体現するエリザベスの他人指向をさらに悪化させ、社交の仮面で低い自己評価と人間不信の素顔を抑圧する三人目の白人主婦が、ヒリーのもう一人の子分でリストカットをいつも長袖に隠して明るく振る舞うルー・アンである。外の空気だけでなく、「元気にならないと実家に帰すぞ」（425）と無理解に脅す夫が支配する家庭内の空気に過剰適応するあまり、素顔の自分など怖くて誰にも出せず、自己抑圧を募らせてはうつ病を病む彼女にとり、自己嫌悪の苦しみを打ち明けられる唯一の親友が自宅のヘルプだった。秘密の悩み、抑圧の苦しみに共感する他者が一人でもいるだけで、みずから抑え込んだ「内なる他者性」とも言うべき自己信頼を取り戻し、ヒリーが発する「メイドを解雇せよ」という指示に抵抗する勇気を最後に奮い起こす。本音を受け入れ秘密を共有する他者の存在の有無は、空気の統制を打開する上でのヒントを与えてくれる。

このように南部のコミュニティを束ねてきた世間はすでに壊れかけているが、白人専業主婦たちは広く国や社会に目を向ける自己政治化の機会を持たないまま、家庭と「ママ友」と地元婦人団体という狭い世界の保守的な空気の下、相互監視と相互規制によってやんわりと統制されている。人種差別や性差別、世間の一般欲望に囚われたブルジョワ消費主義など支配的イデオロギーを幾重にも内面化し重層的に主体化された彼女たちは、「横並び」が安心をもたらすと信じ、進んで場のムードに自分を溶かし込み無色透明になろうとする。その代償として、抱え込んだ素の自分への嫌悪感と人間不信を彼女たちは抑圧しなければならない。そんな空気の統制を解体するのが、スキーターとヘルプたちの境界横断的な「ゲリラ」活動である。

3 贈与が育む自己肯定感と他者への信頼は、場の空気を変える

認識され意味や価値を帯びた言語表象^{リプレゼンテーション}と、元の事実とは異なる。ソシユール以降の構造主義が明らかにしたように「白人らしさ」「ブルジョワらしさ」「女らしさ」「美しさ」「モテ」他すべてのカテゴリー／普通名詞の意味内容は、スティグマ化された「そうでないもの」との対比、対他的な二項対立による序列化によって「らしさ」を分節化するランゲージの作用である以上、地域文化によっても時代によっても可変的な共同幻想であり、特殊相対的な恣意性につきまといわれた言語認識でしかない。だが今日の歴史認識問題からもわかるように、私たちはつい自分（たち）の見方だけを不変の事実、すなわち「常識」として実体的に捉えがちだ。ところが常識化した一般欲望を首尾よく実現しカテゴリーに同一化しても、そうやって世間から「人並み」と一過性で承認された「見せたい私」「なりたかった私」の中に「唯一無二の私」を探しても、残念ながら徒労に終わる。カテゴリーへ包摂されたとともに、同じカテゴリー内の他者と取替え可能に見えてしまうからだ。加えて情報化が進み差異化のスピードが増す現在、異なる流行、異なる尺度、異なる文化や時代の見方によって、絶対視した常識は簡単に相対化されてしまう。一般欲望のみに突き動かされ、集団の空気に溶け込んで得られる「同じ」「ふつう」という安心は、一時ナルシズムを満たしはするが、多数派の承認が孕む匿名性と無責任によって絶えず不安と背中合わせにある。より堅固な自己信頼、素顔のままで自己肯定感を持つには、何かもっと大事なものが欠かせない。

一般欲望に囚われたヒリーの取り巻きと違い、主人公の三人は「固有欲望」を見失わない。これが空気による統制を打破し、共生の新風を場にもたらす重要な契機となる。一般欲望が「スマートに叶えた自分をみんなに見てほしい」と願うなら、固有欲望とは下手でも泥臭くても「自分にとって、それなしでは生きられない」（竹田113）とを感じるものへの実存的な志向を指す。メイドたちの証言本を秘密裡に出そうと奔走する彼女たちにとって、当然「書くこと・語ること」がそれにあたる。特にエイビリーンとスキーターが世間に居場所を失うのを覚悟した上で、あえてヘゲモニーの同調圧力に抗い、みずからの固有欲望を優先するだけの自律性と自己信頼をなぜ、どのように獲得できたのかは一考に値する。

この二人の自律性と自己信頼は「みんな」でなく、人種や世代の垣根を越えたたった一人の他者と贈与の絆を通じた信頼関係を築いた経験に、その足場を負っている。亡き息子との文才を巡る相互承認や自分の書き記した祈りの効力で周囲から一目置かれるエイビリーンは、雇い主エリザベスに叱られた娘が自分を悪い子と思い込むのを止めるために、言葉の暗示力を通じ「あなたはかしこい子、あなたはやさしい子」（傍点斜字94）と論ずことで、子どもがあるがままの自分を肯定する感情を育もうとする。するとお返しにこの二歳の白人の子が描いた黒塗りの自画像を贈られ（416）、母親に向ける以上の愛を働き甲斐という返礼贈与として授かる。じつはこのような持ちつ持たれつの贈与交換がもたらす

信頼関係によって人種や雇用を越えて自尊感情を分かち合う事例は作中少なくない。たとえば作者の幼少時の経験を色濃く反映するスキーターもまた、黒人メイドから自己信頼というギフトを授かっていた。彼女は白人女性美の規範にそぐわない自分の容姿へのコンプレックスに悩んだ思春期を思い出し、メイドから「(ブス呼ばわりする) ばかな連中の言葉を信じるのか?」と問われたこと、そして白人クラスメイトの心無い言葉をたった一言で相対化するこの賢い黒人女性が、最愛の娘を色の薄さゆえに手放しかけた重大な時期にこうして自分を特別な存在と見なしていたことに思い至り、往時を振り返りながら「この歳になるまで、私はずっと人から言われたままを信じていた。政治についても、黒人についても、女の子であることについても。だがコンスタンティンの親指に強く手の平を押され、何を信じるかは自分で選べると気づいたのだ」と回想する(64)。傷ついた弱い自分をそのまま差し出せる自己放擲、すなわち良い意味での「甘え」は、壊れやすくかけがえない贈与として受けとめねばと相手の心も開かせる。カテゴリーによらず唯一無二の「個」として互いに認め合えた親密な交流のおかげで、場の空気を素直に信じる「良い子」の安心よりも、自律と自己信頼の大切さをスキーターも黒人女性から学んでいた。統制の圧力に屈しそうになるたびに「コンスタンティンならどう思うだろう」(288)と彼女は自問する。不特定多数が醸し出す暗黙の空気ではなく、自分にとって大事な特定の他者への応答こそ、自律度を測る尺度となる。メイドの証言本を出すという彼女の固有欲望は、自己肯定感を育ててくれた恩人である今は亡き黒人女性への返礼贈与だった。

こうして贈与のリレーは、固有の欲望を女たちに目覚めさせてゆく。空気の統制に一人抗うスキーターからの協力依頼を受け、エイビリーンは自分を頼って懷へ飛び込んできた若い白人女性の無防備な自己贈与に応えるべく、長い物に巻かれる保身を捨てようと返礼贈与を申し出る中で、初めて自らの固有欲望の価値に気づく。すなわち雇う側からしか語られてこなかったヘルプとしての経験を、自分たち自身の声で語り直したいと。すると親友のミニーマでもが固有欲望を生きる二人の泥臭い奮闘ぶりから勇気を授かり、ヒリーたちの一員として認められたいとする一般欲望から雇い主シーリアを解き放ち、さらに証言本の中で「王様は裸だ」と世間にヒリーの真実を知らしめる「悪役」を買って出る。こうして少数の大事な他者とありのままの素顔を分かち合う相互承認から、自己肯定感と自律が芽生え、それがみずからの固有欲望に火をつける。一般欲望でなく固有の生を生きたいと闘う女たちの贈与のリレーは、やがて人種や立場を越えて信頼の輪を広げ、保身の空気に支配された女たちの世間に新風を吹き込む。

では空気に従う束の間の安心と、贈与がもたらす自他への信頼はどこが異なるのだろうか? 空気への同一化も他律的な一般欲望の追求も、しょせん周囲からの承認評価のもたらす安心はナルシスティックで一過性でしかなく、過剰適応が自分の「色」への嫌悪と人間不信を招きやすかった。そもそも人間の作る文化や社会の価値システムが言語の恣意性に基づく共同幻想である以上、絶対と信じた価値や意味もいずれ相対化を免れないことも既に述べた。だが、かといって相対主義も虚無主義も弱者のエンパワーにはつながらない。

脆弱極まりない自己肯定感に「普遍」や「絶対」の支えを与える。それは贈与のリレーの育む自他への信頼がその基礎を、文化社会という人為の枠を越えた^{スピリチュアル}霊^ス的とも言うべき経験に置いているからではないだろうか。

一例を挙げる。エイビリーンはある日先述の子どもから、「どうして黒くなったの？」といきなり聞かれる。自分を見下す人種主義の空気^スにいずれこの子までもが染まるのを懸念すると、慣れ親しんだ子が初めて見せる「他者性」に満ちたこの問いに真顔で向き合い、「それはね、神さまがあたしを黒くしたから。この世に他の答えはひとつもないの」と論ず（399）。神は人間一人一人をユニークな存在たらしめ、（カテゴリー化で「同じ」と括らず）個別の違いにおいて等しく万人を愛する。そんな創り主が人種という人間の編み出した疑似科学的カテゴリー認識に由来する差別など決して許すはずがないという、黒人キリスト者の強い信仰が伺われる一節だ。人為的で特殊相対的な言語文化や社会の価値システムを超えて、神や宇宙と言う普遍の相から個の「かけがえのなさ」をとらえ直す^{スピリチュアル}霊^ス的な視点が、彼女の自己肯定感を揺るがぬものとしている。文化や社会が規定する「何者か」という反復・置き換え可能なカテゴリーによらず、「同じ川には二度と飛び込めない」万物流転の只中で、やり直しも取替えもきかない一回限りの生と生が奇跡的に出会い、相手を誰とも異なるユニークな存在とし、こちらの期待や思い込み（カテゴリー化）を裏切る驚きにこそ、相手が今その只中にある唯一無二の生に気づく端緒を見る。こんな他者の「他者性」と出会う瞬間にこそ、個のかけがえのなさが宿るのではないだろうか。自分は大事だといくら叫んでも空しい。場の空気への同調や「みんな」からの承認・評価もあてにならない。確固たる自己肯定感が育つのは、自分にとって大事な他者が開示する他者性を互いに配慮し、丸ごとの承認を与え合う個人間の親密な贈与的^{コミュニケーション}交換^スの過程において他にはない。社会内存在としてでなく、宇宙内でのかけがえのない一期一会をもたらし唯一無二の「片割れ」だから、個は誰とも異なるその異質性において肯定できるのだと。

4 贈与の精神を越境させる無垢のトリックスター：結びに代えて

様々な危機を自律と自己信頼で乗り越えて固有欲望にまい進する三人の主人公は、主婦たちの社交が自明視する中心的価値とはかけ離れた、慎ましい日々を物語るヘルプたちの声を集めてゆく。子どもや老婆やうつ病者に長年寄り添った者だけが語れる経験。それは周縁化された白人女性と、差別や搾取や抑圧を生き抜く外部の黒人女性が人知れず織り成す、人種や立場を越えた貴重な贈与的交流の証言だった。依然セイフティネットとして機能する黒人共同体からもたらされた贈与精神が、抑圧的な空気^スに信頼醸成の新風を吹き込んでいた。白人の女性も中心に心を奪われさえしなければ、周縁は外部と出会えるかけがえのない境^{ボーダーランズ}域^スになりえる。中心と周縁と外部を隔てる境界線を越えて声なき声を往還させる主人公たちは、いわば声の「運び屋」であり、女たちを統制してきた場の空気を内側から変えるトリックスターと言える。

ありのままで壊れやすいことを別名「無垢」ともいう。『ハックルベリー・フィンの冒険』や『草の葉』に代表されるように、アメリカ文学は自我の殻を破ったこの始源への回帰をしばしばテーマとしてきた。この小説もまた南部の停滞した空気に新風を巻き起こす「わたたちの公民権運動」を描くことで、無垢の自分に正直に生きる真の自由を取り戻した時、人は初めて人為の壁、人種や貧富やジェンダーをめぐる認識の垣根を越えて贈与の^{たすき}襷をつなげ、信頼の輪を広げられるのではないかと読者に問いかける。「マイノリティであることを怖れるな」という至言を遺したのはたしか筑紫哲也だった。人は千差万別、それぞれが究極の「少数派」として一回限りの生を生きるしかない。その単独性ゆえに、個は等しく尊い。「同じ」をめざすだけの統制から、真の調和は生まれない。この事実を分かち合える他者との出会いを重ね、こちらの認識世界を広げてくれる外部からの贈与^{ギフト}として未知や異質を歓待するだけの耐性を磨く。これがエンパワーの真意であり、多数派の専制から民主主義を救う道は他にない。

引用文献

- Stockett, Kathryn. *The Help*. New York: Berkley Books, 2009. () 内に引用頁数を記す。なお下記の翻訳を参照しつつ適宜修正した。
- ストケット、キャスリン『ヘルプ』栗原百代訳 上下巻 東京：集英社、2012年。
- 鴻上尚史『「空気」と「世間」』東京：講談社、2009年。
- 長塚圭史・竹田青嗣『Q わたしの思考探究 (2)』NHK「Q」制作班編 東京：NHK 出版、2011年。
- 山岸俊男『安心社会から信頼社会へ』東京：中央公論新社、1999年。
- 『心でっかちな日本人』東京：筑摩書房、2010年。
- リースマン、デイヴィッド『孤独な群衆』加藤秀俊訳 上下巻 東京：みすず書房、2013年。
- 和田秀樹『なぜ若者はトイレで「ひとりランチ」をするのか』東京：祥伝社、2010年。

Manipulative and Trustful Relationships: Merits and Demerits of “Sensing the Atmosphere of a Situation” in Kathryn Stockett’s *The Help*

Shuzo SAITO

What is control by a tense or oppressive atmosphere like when some tacit agreement is expected? How does it affect people’s behavior when they are required to sense the mood of a situation? What should people keep in mind when they are put under pressure to give their voluntary or involuntary consent to the intolerant mind-set of public opinion? This essay deals with these questions from the viewpoint of women’s lives in the Southern U. S. during the Jim Crow era of the early 1960s described in Kathryn Stockett’s best-selling novel *The Help* (2009). Revolving around three different characters as they tell their lives on different sides of the racial barrier, the story is about their joint project to write a book secretly to bring into the open what working as a black maid in a white household is really like. In spite of the terrible risks they have to take because of the hostile surroundings of racial segregation, the three courageous women provide us with many clues to these questions. This novel tells us it is sometimes important for us *not* to sense the mood of a situation especially when people’s mind-set is oppressive.

Keywords : American Literature, Kathryn Stockett, general public’s mind-set and behavior, gift exchange, self-esteem, empowerment, manipulative relationships
